人間学類キャリアガイダンス2006を終えて

甲斐雄一郎
人間総合科学研究科助教授

1. キャリアガイダンス2006の開催まで

キャリアガイダンスは人間学類で行っている進路説明会の別称である。2004年に第一回を開催して以来、2006年2月15日の開催で三回目を数えることになった。発端は2003年度入学の人間学類生による、学類固有の進路のあり方を知りたいという希望であったという。その声を当時の学類長、そして就職委員会が正面から受け止めて、徐々に情報提供を用意する機会が設けられるに至ったのである。

今回のプログラムは学生と学生スタッフが実施した学類生に対するアンケート調査の結果に基づいて、就職委員会と学生との会議を経て、「基調講演」と「先輩の経験談」で構成することに決定した。第二回の実施方法にならったものである。

「基調講演」は労働政策研究・研修機構の下村英雄氏（心理学主専攻出身）、「先輩の経験談」は、ベネッセ・コーポレーションに就職が決まった北原智史さん（教育学主専攻2005年度4年生）、お茶の水女子大大学院を経て、現在東京都職員として都立北療育医療センターに勤務しておられる松下明代さん（2000年度心理学主専攻卒業）、つくば市役所障害福祉課に勤務しておられる三冨純一さん（心身障害学主専攻2003年度卒業）にそれぞれお願いすることとなった。

こちらからの依頼に対してすべての方が快諾してくださった。会場設営やポスター類の準備も、学生スタッフが引き受けてくれて、当日の準備は整ったのである。

2. キャリアガイダンス当日

2006年2月15日、約60名の学生が参加して「キャリアガイダンス 2006」は始まった。初めに発達心理学を専攻する新井邦二郎学類長が、進路について考えることは、とりもなおさず自分自身の成長について考えることにつながる、と説いた挨拶に続いて基

調講演が始まった。

⑴ 基調講演

下村氏の基調講演は「どうすればうまくいくのか、大学生の進路選択－進路選択研究から分かる成功パターン－」と題して行われた。それは50分弱という限られた時間の中で、人間学類生が可能な限り希望の職種に就くための方法、またそのための考え方であった。

要約するならば、まず就職活動の成功パターンとして説かれたのが進路意思決定に対する自己効力感を高めることの重要性である。そしてそのような確信に至るための方策として、就職活動への第一歩の踏み出し方を説明するとともに、多くの大学生がその一歩を踏み出せない諸要因として、「何をやりたいか」がわからないという場合、また未来志向の諸活動を妨げる「現在の自分の悩み」に苦しんでいる場合を挙げ、それぞれの問題に対してどう考え、どう対処するのが適切か、ということについて豊富な知見に基づいて説得的な話を展開してくださった。

⑵ 先輩の経験談

北原さんは「ベネッセコーポレーションへの軌跡」と題してベネッセ内定までの話を中心に、就職活動の経験を通して学んだこと、また筑波大生ならではの苦労や対策などを具体的に話をしてくださった。興味深かったのは当然といえば当然のことなのだが、下村氏の基調講演における就職活動の成功パターンの定石通りの活動を北原氏が生き生きと遂行していたことであった。すなわちインターンシップに積極的に参加し、OBに面会を求めてそこから次々とネットワークを構築し、第一希望の会社の経営陣に対する具体的な企画のプレゼンテーションに挑戦したりすることなどである。

続く「先輩の経験談」は松下さんによる「他大学の修士課程から心理学専門職へ進む」と題された話であった。松下さんは臨床心理士養成大学院から東京都の心理職に就いた経験から、まず、他大学の大学院に進学する際の留意点や臨床心理士養成大学院における生活のあり方、などについてご自身の経験を通して語ってくださった。またこれもご自身の経験から公務員心理職の種類と試験の特徴、試験対策のポイントなどについても丁寧に解説してくださった。いわゆる心理職には、現在お勤めの地方自治体の他、ご自身も合格したという国家一種、そして家裁調査官、法務教官、障害者職業カウンセラーなど多様な職種、また職種の差異に応じた多様な試験の方法があることを初めて知った心理学主専攻希望の一年生は少なくなかったと思われる。

最後は三冨さんによる「公務員になって分かること」と題する内容であった。三冨

さんは公務員採用試験の勉強のポイントと試験の実際、つくば市役所の障害福祉課における仕事の、現時点でご自身が大切にしておられる公務員としての心構えなどについて話をしてくださった。

採用試験の内容として興味深かったのは、筆記試験に合格したグループ11名による「環境問題について」という大きなテーマだけを与えられた集団討論である。結果として11名中合格したのは3名だったそうであるが、その3名とは、それぞれ筋道からそれた議論を本筋に戻す役割を果たした人、環境問題についての話題をふくらませた人、討論全体を通しての論点をまとめた人だったということである。さらに最終の個別面接で問われたのは年金に関わる時事問題等に加えて、「一番大事な友達はどういう人ですか」という質問だったそうである。三富さんはそこから個人の人間性の全体を問われていると実感した、と話してくださった。

三人の先輩による話が終わったのは当初の予定通り15時であった。その後30分ほどの時間を「先輩を囲む座談会」として準備していたが、それぞれの先輩に対して質問したいことがある学生が少なくなく、結局、先輩方の御厚意によって16時過ぎまで熱心な質問と丁寧な回答の時間が繰り広げられることになった。

3. 2006年度以降の活動にむけて

表現はそれぞれ異なるものの、「先輩の経験談」で共通して語られたのは実践的コミュニケーション能力の重要性であった。これは人間学類における日々の授業で追究しつつあるところであるが、あわせてその内容をなす進路選択に関わる情報提供も重要な課題であろう。

人間学類では2007年に開設される人間学群での必修科目化を前提として、2006年度は「キャリアデザイン入門」を一年生、また「キャリアデザイン自由研究」を二年生以上のための開設授業科目として位置づける。これは就職委員会が責任を担う科目であるが、就職課や人間学類構成員ならではの関係する専門を持つ先生方、さらにはいわゆる外部講師やOBの協力を仰ぎつつ進めていくことになる。

2004年度・2005年度と続いたこの「キャリアガイダンス」の経験は、その実施にむけた貴重な経験であった。ご協力いただいた各位に心よりお礼申し上げる。

（かい　ゆういちろう／人文科教育学）